CIVIL TALK

対談

安藤忠雄VS近藤三津枝

新しい都市の展望を語る

まだ記憶に新しい阪神大震災は、
我々人間の想像力をはるかに超えた自然の脅威でした。
破壊された都市は、わが国の優れた技術力と
人々の心をひとつにした意志の力により
復旧されつつありますが、果たして復興は？
国際化、高齢化社会の到来の渦中で、
新しい都市づくりへのビジョンが求められています。
関西復興をキーワードとして、アジアに開かれ、
人々が快適に暮らせる新しい都市の
展望について語っていただきました。

海の集合住宅 —— 神戸

建築家
安藤忠雄氏
大阪市生まれ。独学で建築設計を学ぶ。
作品に「住吉の長屋」(日本建築学会賞)
「大阪府立近つ飛鳥博物館」(日本芸術大賞)など。
78年以来20年の歳月をかけて進行中の
「六甲の集合住宅」では六甲の急斜面に挑戦している。
94年度朝日賞受賞。95年、建築界のノーベル賞といわれる
プリッカー賞受賞。

ジャーナリスト
近藤三津枝氏
芦屋市生まれ。
PANCOT代表取締役。
武庫川女子大学講師。
経済番組のキャスターとして世界各地を
積極的にレポートするとともに、
兵庫県21世紀の道路を考える委員など
街づくりの分野でも活躍中。

21世紀へ 関西の再生と創造

精神構造も分断された大震災

近藤　阪神大震災は私たちにはまだ生々しい記憶として残っていますが、最初にニュースで災害の状況を見た時には、関西で地震なんて、あの神戸が、あの街が、という思いで刻々と流される映像が信じられなかったですね。私たちにはもしもの時への危機感がまったくなかった、という気がします。これを教訓として、都市づくりの観点からこの震災をとらえなおすことが必要だと思いますが、いかがですか。

安藤　人間の想像力をはるかに超えた災害なので、抗えないというところがありますが、海に囲まれ山が多い、世界でも有数の地震国に住んでいる我々日本人が、自然に対して畏怖を持って生活してきたかと考えると、それはずいぶん怪しかった。淡路島の北淡町の東側に、本堂の真上に蓮池のあるお寺を作ったんですが、当初の説明では檀家の人々は「淡路は台風が多い。台風で水漏れして仏さんに水が被ったらどうするか」と全員反対だったんです。台風の話は出ても地震の話はまったく出なかったんですよ。

近藤　本福寺ですね。私もうかがったことがあります。先の地震でも水漏れもなく、仏様ももちろん無事だったとか。

安藤　日頃地震をイメージしないで生活しているので、まさかというショックが大きいんですね。世界でも珍しい都市型の地震で、道路や鉄道、ライフラインの破滅によって、日本列島が分断されたのだけれど、同時に日本人の精神構造もプッツリ切れてしまった。復興がスムーズに行なわれないと、日本人の精神構造も戻ってこないと思います。

日本は世界でも突出した貯金国なんです。これは、もし何かあっても国はあてにならない、自分たちの家族や地域は自分たちで守らなきゃと貯金するんですね。使うと不安だから使えないということでどんどん貯める。金持ちでも豊かな国ではないんです。だから本当に豊かな生活を実現するためにも、国が一丸となってきっちりした政策のもとに今回の復旧と復興を考えていかねばならないですね。

ライフラインを継ぎ足しながらできた街日本

近藤　震災の直後には復旧にはどれくらいの時間がかかるのだろうと気の遠くなる思いでしたが、道路やライフラインの復旧の早さは日本人にとって自信になったのではないでしょうか。

安藤　日本は戦後、経済優先型で出来あがった都市なんです。本来、ライフラインはなかったんです。西洋の都市づくりでは、まず役所、広場、教会などの公共スペースのレイアウトから始まり、それにともない生活空間ができていっている。日本は反対に、クルマが増えたから道路を広げよう、水道がないから水道をつけよう、というやり方ですね。ある意味では場当たり的、ある意味では臨機応変に、ライフラインを継ぎ足しながら発展してきたんです。歴史を重ね合い、同時に機能も重ね合っている世界に例のない都市なのです。だから、都市計画のない都市国家の悲しさというか、共同溝の中にライフラインがあるわけではなく、継ぎ足し継ぎ足し復旧したのであって、復興には時間がかかると思いますね。

安藤忠雄VS近藤三津枝

真言宗本福寺水御堂

山をつくり、海をつくるエネルギー

近藤　何年か前から、たとえば道路ひとつとりましても、機能性の追求だけでなく、これからはいかに付加価値をつけて感度を良くした道づくりをするかということについて各方面で取り組んできたと思うのですが…。変な言い方ですが、この震災を機に、今まで描いてきた街づくりのグランドデザインにチャレンジできるのではないでしょうか。

安藤　大きく組み変えるのはなかなかむずかしいでしょうね。継ぎ足しながら接木でやってきた中で合理的に街をつくり上げてきたという、日本の都市の良さもありますから。しかし、都市は生活文化で成り立ってもいるんです。たとえば神戸のパンはおいしい、といわれますが、神戸だけが特別おいしいのではなく、「生活が豊かだ」という神戸が持つイメージのブランドでパンがおいしかったのですね。ここを大切にして街を作り直していかなくてはならない。目に見えない都市をサポートする部分をも考えて、それぞれの都市の個性に従った街づくりがあるだろうということです。

近藤　誰もが住んでみたいという街づくりへのチャンスともとらえられますね。

安藤　六甲山は元々禿げ山だったんですよ。それをあれだけの緑にしたくらいのエネルギーが神戸にはあったんです。自分たちの山をつくり自分たちの海をつくり神戸という街ができあがってきたんです。今、そのエネルギーがあるかということなんですね。かつてのような街づくりへの情熱があるならば阪神間は見事に生まれ変わるだろうと思います。

近藤　外国人にとって、日本の有名な都市は東京であって、大阪は知らないのですね。ところが先日、ドイツに行ったのですが、ドイツの小さな村の人が「神戸はどうか」と聞いてくるのです。あの大震災のニュースが世界をかけめぐり、神戸はすっかり有名になって注目を浴びているのだと感じました。この注目に応えるような街づくりを考えたいですね。

老人と子供が渾然と暮らす自由空間としての街

近藤　日本は完全な高齢社会になりつつあります。食事や医療といった基本的な施設の充実ももちろん大切ですが、老人が安心して住めるという観点からどのような街づくりが必要でしょうか。

安藤　子供の声を聞きながら、子供が遊ぶ姿を見ながら暮らす、という老人から子供まで渾然一体となって生活するのがいいと思いますね。しかし、これは管理がむずかしい。日本は経済オンリーでやってきたので、同じ世代で同じ賃金体系の人が集まるというような管理のしやすい街づくりをやってきたんですね。管理のしやすい街は住みやすいかというと必ずしもそうではない。国家は破綻しているが住みやすいという最たる都市はイタリアですね。日本はその反対なんです。

先の震災で思ったのは子供たちが元気だったということです。近所の解体の手伝いをする、困っているおばあさんの水を運んでやる、と実に生き生きしていた。人間というのは自分の存在が認められると元気になりますからね。子供の頃から老人と仲良くしていると、老人とつき合う“心”ができるんです。残念ながら今の都市には、子供は学校へ、お父さんは会社へ、お母さんはサークル活動へといった具合に各々が隔離されて生活しているので老人の居場所がない。街が子供も老人も仲良くしているという自由空間であれば、子供には人間のやさしさが育まれると思いますね。高齢化社会を支えるのは人間のやさしさですから。

今までは汚れたからいかん、ピカピカの間は元気という都市をつくってきたけれど、これからはうまく歳をとっていく建物、街をつくっていかなければ、本当の高齢化社会はやってこないと思いますね。

アジアにとって魅力ある関西とは

近藤　日本人は世代を超えたフレキシブルな付き合いがどうもできていない、とおっしゃいましたが、それは外国人に対しても同様で、日本人はどうも付き合い方がへたではないでしょうか。関空というアジアへの玄関口ができたのですから、もっと交流する方法を考えなければならないですね。

安藤　日本人は異質なものを認めないという社会をつくってきて、異なった民族の人と対話をする訓練ができていないので、アジアの人と腹を割って話をすることができないんですね。本当の交流は心が開かれていないとできないんですよ。日本人の交流はビジネスだったので、心を分かち合える交流がないんですね。現代美術でも音楽でも建築でもタイや中国などアジアのコンピュータエイジの人はずっと先を進んでいる。日本はむしろ遅れているのに自分は進んでいると思っているのだから、これは対話にならないですよ。今、世界中で最も元気なアジアの中で、日本だけが孤立していると感じます。お金のあるうちは日本に来てくれますが、お金がなくなればだんだん日本に来なくなりますよ。

近藤　アジアの中でそれではいけないわけで、経済については今までのように右肩上がりにはいかない、となれば、日本の中の関西は経済の代わりに何で交流できるかということを考えなくてはいけない時期でしょうね。関西にある文化性をいかに生かして、アジアの人と情報交換をして交流をはかるかということがスポットを浴びていますが、現実にそのようなテーマを街づくりにどう生かしていいのか、そのあたりはどうお考えですか。

安藤　まず、異なったことを認める社会になることですね。関西は冒険心とか勇気といったものをあまり認めない街なんですね。生きやすい街なんだけれども、爆発することのないもちつもたれつの街というか。異文化を認めないし、異文化をもった人もやってこない。だから何かやりたい人は東京に行く。数学、物理、音楽などをやりたい人はアメリカへ、絵画、彫刻はフランス、イタリアというように異なった文化を持つ人は出ていってしまうんですね。街は人間がつくるものなんだから、まず人間を生む土壌にならなければいけない。

近藤　それにはもっと広い視野を持つというか、かなりの発想の転換が必要でしょうね。

安藤　関西というのは大阪ベイエリアを中心としてこれだけ接近した地域なんだから、大阪だ、京都だ、奈良だとか言わずにひとつにしたらいいと思うんですよ。知事を一人にしてネットワークしていくくらいのことが必要なんじゃないですか。大阪でコンベンションして、京都を見に行って、神戸に泊まるというくらいの距離なんですから。これをひとつに考えて、魅力的な関西というエリアを世界に売る。そこへ行け

人・都市・社会が上手に歳をとっていく街づくり

高齢化・国際化社会への視点

我々は街を造り、環境を創る

新しい都市開発の使命

安藤忠雄VS近藤三津枝

ばいつも何かが起こっているんだというようになればいいんですが。

東京にはSF的な都市を見ているおもしろさがあって、世界に人にとって東京は魅力的な都市になりかかっていたんですが、実は世界中の人が集まってきていたのはビジネスチャンスのためだったんですね。お金で成り立っていた。その限界がわかったので、関西はお金で人が集まらない都市をつくりたいですよね。そういった都市になると意外に生き延びるのかなあと思います。パリに行く時「何かビジネスを」などと考えてはいないでしょ。

近藤　今、非常に躍動的なアジアの中で、日本の21世紀の姿が見えてこないんですよね。

安藤　今のアジアは人間でいうと20代、30代の元気な時ですから。もう日本でつくる産業はホテルであるとかファッションといったサービス産業かなあ。大阪で今からテレビを生産する会社をつくろうとはならない。たぶん、イメージとしてはパリやニースやベニスという風になっていくんでしょうね。

快適な生活を支えるベイエリア開発

近藤　大阪湾はたいへんきれいな海になって、恋人たちの新しいデートコースとしてもなかなか人気があるようですが、たとえばベイエリア開発は関西の各都市が手をつなぎ連携プレーをするキーポイントになっていくのではないですか。

安藤　ベイエリアは非常に重要だとは思うのですが、どういう開発をするかです。基本的には快適な生活を支えるための開発であるべきですね。今までのように、造船事業とか港湾事業といった産業を支えるための開発ではだめですね。その産業構造は他のアジア地域に移ってきているわけですから、今度はベイエリアをもう一度生まれ変わらせて、たとえばユニバーサルスタジオのようなものも含め、楽しい快適な生活を支えるような開発をしていくことが必要ですね。ベイエリアについて、果たしてアジアにもない西洋にもない魅力があるか、ということをみんなで考えなくちゃいけないでしょうね。

勇気と冒険心にあふれたワクワクする街づくり

近藤　外国からお客さまが関西に来た時に、案内する所に困るということがありますね。京都、奈良でお茶をにごすというか、行くところがないんです。

安藤　古いものもいいけれど、やっぱり新しいものを見たいんですね。法隆寺や東大寺を見て、あんな巨大なものを作り上げたあの時代の人間の冒険心であるとか技術に、我々はワクワクするんですよ。それと同様に今、「ほう、こんなすごいものをよくやったな」というものがあるかということなんですよ。普通に万遍なくよくできたというものはどこにでもあるわけだから、それをわざわざ研究にも観光にも来ないでしょう。たとえばパリのポンピドーセンターは、あの美しい街に機械みたいなものがあるわけだから、できて20年くらい経つけれども今だにみんな、うーんと違和感をもっている。しかしそれは力ですからね。これをつくった人がいるんだ、すごいなあと思うわけです。関西にも、「こんなすごいものをよくつくったな」という心意気のあるものをつくらなきゃいかんと思いますね。人間というのは勇気と冒険心にあふれたワクワクするものを見たいんですから。

建設業は環境を創る社会的存在なのだ

近藤　最後に関西の新しい都市開発について、建設業への提言などお聞かせいただきたいのですが。

安藤　先の震災では復旧活動にかなりの貢献をされたと思うのですが、今後は復興をめざして、建設業の方々には「我々は道路も建築もつくるが環境もつくります」というキャンペーンをしてほしいですね。せめて大きな木をいっぱい植えようというくらいの運動をお願いしたい。

たとえば建築物をひとつ建てたら木を2～3本植えるということから、未来のすばらしい街づくりが始まるんですよ。木だとそれほどの費用もかからないし、木は5年経てば倍の大きさになる。楠木なら30m位になりますが、30mというのは10階建てのビルとほぼ同じですから。木が育っていくと街並はみるみる変わっていきますよ。

近藤　バンコクのオフィス街に行った時ですが、夕方街の木にヒッチコックの鳥のように、空が真っ黒になるくらいの鳥の大群が帰ってくるんですね。他に行くところがないんです。このように建築は環境の敵、とつい考えられている側面がありますからね。木を植えていくというのはすばらしいですね。

安藤　阪神大震災のエリアについても高齢化社会向けの実験ができないか、と思っているんですが、高齢化、国際化社会に向けて、5年後には世界の人が「こういうふうに復興したのか、すごいな」と見学に来るような復興を、行政と対話をしながら遂げてほしいですね。どういうふうに復興するのかという世界中の期待に、我々は応えねばならないし、関西をどれだけすばらしい都市に再生させるかという責任もあると思います。建設業は、生活をしている人が楽しいと思い、快適に暮らせる環境をつくる使命をもった、社会的な存在だからです。

近藤　今日はどうもありがとうございました。